

県史跡

川合次郎兵衛塚

1号墳



今から約1400年前の可児では、数多くの古墳が造されました。可児市川合地区では、20基もの古墳が調査されています。その中でも川合次郎兵衛塚1号墳は、最も規模が大きな古墳です。

岐阜県下最大級の方墳



古墳時代の終わり頃、7世紀の初めに築かれた次郎兵衛塚1号墳は、一辺29.5mで、上空から見ると、ほぼ正方形に造られています。

このような形の古墳を、方墳と呼びます。

方墳は、6世紀後半頃から前方後円墳に代わって造られるようになった、新しいスタイルの首長墳です。それ以前は、前方後円墳や前方後方墳が首長の墓でした。

首長墳への方墳の採用は、中央政権（ヤマト政権）の動向と連動しています。同じ頃、美濃地方では6つの地域で大型の方墳が築かれました。

次郎兵衛塚1号墳は、今より広い「可児地域」の首長墳なのです。

川原石で葺かれた墳丘

次郎兵衛塚1号墳は、全体が大きな川原石で葺かれています。二段に造られた墳丘には、平坦な場所にも、こぶし大の川原石が敷かれています。墳丘に葺かれた川原石の数は、2万個を超えていました。

また、内部の横穴式石室も川原石で築かれています。

次郎兵衛塚1号墳のように、川原石で築かれた横穴式石室を有する古墳は、木曾川や長良川の近くで多く造られました。

川原石は、木曾川の川原まで行かなくても、川合地区の低位段丘面の地下から容易に入手できます。しかし、この古墳を造るのにかかる膨大な労力を考えると、「可児地域」の首長の大きな権力がうかがえます。



発掘された東側下段の葺石

3つの横穴式石室



主室 全長15.5m

遺体を安置する部屋(玄室)と、そこへの通路(羨道・前庭部)に分かれています。

さらに、玄室は2部屋に区切られており、奥を後室、手前を前室と呼びます。このような横穴式石室の構造を「複室構造」といい、この地方では、川原石積みの石室によく採用されています。

西副室 全長7.4m

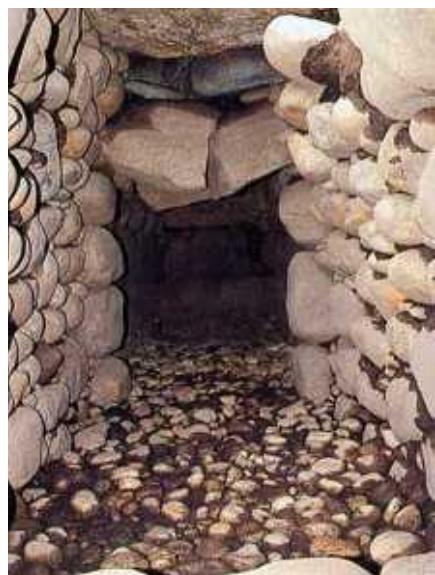
正面から見て左側に設けられた横穴式石室です。

発掘調査から、東西の副室は古墳が完成した後に増築されたことが分かっています。

東副室 全長1.7m

正面から見て右側に設けられた、小さな横穴式石室です。

その大きさとミニチュアも含む副葬品から、子どもが埋葬されたものと考えられます。



主室の玄室の様子

豊富な副葬品 <川合考古資料館で展示中>

3つの石室の中や周囲からは、数多くの副葬品などが見つかっています。様々な形の須恵器や鉄鏃などの鉄器、ガラス玉や金色に輝く耳環などの装身具が主なものです。

須恵器などの出土遺物の年代から、主室には2回以上の埋葬が行われ、東と西の副室は、おそらく一度だけ埋葬が行われたと考えられます。

主室の例のように、2回目以降の埋葬のことを「追葬」といいます。

古墳の規模や副葬品から、ここに葬られた首長とその家族が、川合地区を拠点に当時の「可児地域」全体を治めていたことが分かります。



東副室周囲出土の須恵器類

これらの出土品は、次郎兵衛塚1号墳の横の「川合考古資料館」で見ることができます。(入館無料)
〒509-0208 可児市川合北2丁目14番地 川合公民館内
休館日:毎週月曜日(祝日を除く)・祝日の翌日
電話番号:0574-63-4339



主室出土の耳環

主室出土のガラス製玉類